

# 大学生における身体不満足感と身体醜形懸念

## Body dissatisfaction and body dysmorphic concern among undergraduate students

田 中 勝 則\*

Masanori TANAKA\*

### 要 旨

自分の容姿の問題に対する精神的苦痛やこれに伴う問題行動に関する疾患として、身体醜形障害（Body Dysmorphic Disorder: BDD）があげられる。BDDは青年期に好発することが知られており、大学生の中にも身体不満足感を訴える群において軽度のBDD症状が確認されることが報告されている。近年、BDD症状については臨床群から非臨床群まで量的な連続性を有することが指摘されており、非臨床群のBDD症状を身体醜形懸念と再定義する動きもある。本研究では大学生を対象とし、身体不満足感と身体醜形懸念について検討することを目的とした。身体不満足感については男性よりも女性の方が強い傾向にあること、不満を感じる身体部位も女性の方が多いことが示された。また、身体不満足感と身体醜形懸念との間に正の関連が認められた。男性では鼻、顔の輪郭、頬、額に対する不満足感が、女性では体格、腹部、臀部、腕、体重への不満足感が身体醜形懸念と関連することが示された。以上の結果より、大学生のBDD症状を理解していく際に、不満の対象となる身体部位の性差を踏まえた対応が必要である可能性が示唆された。

### I. 問題と目的

自分の身体が醜いのではないかと悩み苦しむ現象はこれまで醜形恐怖として理解され、主に青年期に生じやすい問題と考えられている（Phillips, 1991）。同様の症状について、DSM-IV-TRでは身体醜形障害（Body Dysmorphic Disorder: BDD）という診断基準により説明がなされている（APA, 2000/2003）。BDDは自己の容姿における想像上の欠陥への没頭、もしくは些細な身体上の欠点に対してその個人が著しい懸念を抱いている状態とされ、その結果、日常場面における回避的行動や確認行動の増加、これに伴う社会機能不全が生じるとされている。これらの症状については他の精神疾患では説明されないものとされており、BDDは体重や体形に対して著しい不満を持ちやすい摂食障害や強い強迫観念に伴う確認行動が特徴とされる強迫性障害とは別個の独立した概念として考えられている（Phillips, 1998）。

海外ではこうした症状についての調査研究が盛んに進められており、BDDが好発する青年期の大学生の中に軽度のBDD症状を有する群が存在することが報

告されている（Altamura et al., 2001）。Biby（1998）の調査では、大学生のうち67%が身体不満足感を有しており、うち13%がBDD症状を有していた。このことから、身体不満足感とBDD症状との間に正の関連が認められる可能性がある。

近年、このように大学生においても軽度のBDD症状が認められていることから、BDDの様々な症状は臨床群と健常群の間の連続線上における現象である可能性が指摘されている（Lambrow et al., 2012）。つまり、BDD好発期である青年期の大学生を対象としたBDD症状についてのアナログ研究を進めることにより、健康な大学生の容姿に対する悩みについての知見が得られるのみならず、臨床群のBDD症状に関する心理学的理解が深まることが期待される。

Littleton et al.（2005）は容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠陥をカムフラージュするための行動、社会的な場面からの回避や安全を求める行動からなるBDD症状を身体醜形懸念（body dysmorphic concern）として再定義を行い、身体醜形懸念を測定するための自

\* 弘前大学教育学部教育保健講座  
Department of School Health Science, Faculty of Education, Hirosaki University

己記入式質問紙である Body Image Concern Inventory (BICI) を開発している。BICI は十分な信頼性と妥当性を有することが報告されている。また、BDD 臨床群と非臨床群の BICI 得点を比較した際に、前者において高得点を示すことが確認されている。わが国では筆者らが BICI の日本語版 (Japanese version of Body Image Concern Inventory: J-BICI) を作成し、信頼性と妥当性について検討したところ良好な結果を得ている。また、大学生において、女性の方が男性よりも身体醜形懸念が高いことも明らかにされている (田中ら, 2011)。

BDD において懸念の対象となる身体部位については性差があることが指摘されており、Phillips et al. (1997) や Perugi et al. (1997) では体重や臀部、太もも、胸部に関する不満足感は男性よりも女性の方が高い一方で、性器や体毛については女性よりも男性において不満足感が高いことが報告されている。我が国でも大学生の身体不満足感を調査した調査研究は幾つか見られ、おおむね同様の傾向の結果が得られているが (金本ら, 1999; 鍋谷ら, 2004), BDD 症状と身体部位に対する不満足感との関連については検討が行われていない。

以上を踏まえ、本研究では、まず、大学生における身体不満足感に関して、身体部位ごとに男女間での不満足感の差異を検討する。次に、身体不満足感と BDD 症状との間に正の関連が示唆されていることから、この関係について男女間でモデルの構築を行い、その検証を試みる。

## II 方 法

### 1. 調査対象と手続き

調査に際して、匿名性の保持と自由意思での調査参加である旨をフェイスシートに記し、口頭で説明を行った上で同意の得られた大学生を対象に調査を実施した。調査には大学の講義時間を活用した。男女大学生 590 名に対し次の質問紙への回答を求めた。なお、フェイスシートにて性別および年齢について記入を求めた。

### 2. 質問紙

#### 1) 身体不満足感

身体不満足感の測定には Phillips et al. (1993) や Rosen et al. (1995) を参考に、身体部位やその特徴を記述した 24 項目 (「髪の毛」, 「鼻」, 「皮膚」, 「目」, 「胸の大きさや形」, 「頭の形」, 「顔の輪郭」, 「体格」, 「唇」, 「顎」, 「腹部」, 「歯」, 「下肢」, 「胸部の筋肉」,

「耳」, 「頬」, 「臀部」, 「腕」, 「首」, 「額」, 「肩」, 「太もも」, 「体重」, 「体毛」) について、5 件法 (“1. とても満足だ” – “5. とても不満だ”) で不満足感を尋ねた。得点が高いほど身体不満足感が高いことを示す。

#### 2) J-BICI

身体醜形懸念を測定するために用いた。J-BICI は全 19 項目で構成される自己記入式の質問紙であり、5 件法 (“1. まったくない” – “5. いつもそうだ”) での回答を求めた。合計得点が高いほど身体醜形懸念が高いことを示す。BICI は 2 因子構造 (「醜形懸念」因子, 「容姿への懸念のための障害」因子) であることが確認されているが、J-BICI は 3 因子 (「容姿の問題に対する安全確保行動」因子, 「容姿の問題からの回避行動」因子, 「容姿への否定的評価」因子) で構成されることが報告されている (田中ら, 2011)。3 因子構造においても十分な信頼性および妥当性が確認されているため、本研究でも 3 因子モデルに基づき検討を行った。

### 3. 統計解析

質問紙への回答について、欠損データのなかった 577 名 (男性 327 名, 女性 250 名, 平均年齢 19.23 歳,  $SD=1.53$ ) を本研究における分析の対象とした。調査に使用した質問紙については Cronbach の  $\alpha$  係数を男女別に算出した。

身体部位の不満足感の性差の検討を行うために、各身体部位についての不満足感得点に関して  $t$  検定を行った。同時に標本効果量 (Cohen's  $d$ ) の算出を行った。Cohen (1992) によれば、 $d$  の値が大きくなるほど 2 群の差が大きいことになる。目安として、 $d=.20$  で小さい差、 $d=.50$  で中程度の差、 $d=.80$  で大きい差が 2 群間にあるとされていることから、この基準を男女間における不満足感の差異の程度を検討する際の指標とした。

身体不満足感と身体醜形懸念の関係については、まず身体部位各項目の不満足感得点と J-BICI で測定される身体醜形懸念の下位因子合計得点および J-BICI 尺度全体での合計得点との間で Pearson の積率相関係数を算出した。次に、身体不満足感と身体醜形懸念との間に正の関連があることを仮定したモデルについて、共分散構造分析により検討を行った。モデルの作成にあたっては、身体部位不満足感各項目の得点および J-BICI の下位因子合計得点を観測変数、身体不満足感および身体醜形懸念を潜在変数とした (Fig1)。モデルの検討手続きとしては次の方法をとった。身

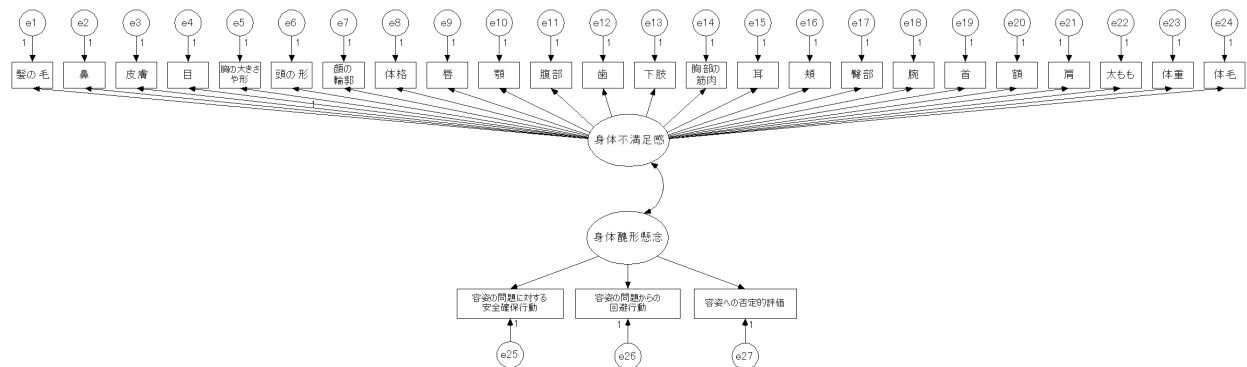


Fig1 身体不満足感と身体醜形懸念の関係についての仮説モデル

体部位各項目の不満足感得点について、J-BICI の尺度全体での合計得点との相関係数の値が低い項目より Fig1 のモデルから除去していき、最終的に最も適合度のよいモデルを採用することとした。なお、先行研究 (Perugi et al., 1997 ; Phillips et al., 1997) より身体不満足感の生じる部位には性差があることが想定されたため、男女別にモデルの検討を行うこととした。モデルの適合度指標には単一モデルの指標として GFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index), CFI (Comparative Fit Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を用いた。GFI, AGFI, CFI は値が1に近いほどモデルへのデータの当てはまりがよいとされ、.90以上が十分な値の目安とされている。また、RMSEA は .05以下であればモデルのデータへの当てはまりがよく、.10以上であればそのモデルは不適切であるとされている。複数モデル間の適合度指標としては AIC (Akaike Information Criteria) および CAIC (Consistent Akaike's Information Criterion) を用いた。これらの値が小さいほどよいモデルであるとされている (豊田, 2007)。

以上の統計解析には SPSS Statistics 17.0 for Windows および Amos17.0を用いた。各統計の有意水準は 5 % に設定した。

### III 結果

#### 1. 身体不満足感の性差について

身体不満足感を測定した項目全体での  $\alpha$  係数は男性のみの場合では  $\alpha = .96$ , 女性のみの場合では  $\alpha = .90$  であった。この結果より、今回身体不満足感を測定するために用いた項目群については十分な内的整合性が保たれていると判断し、以下の分析を進めた。

身体不満足感の項目全体での平均得点は男性73.64 ( $SD=15.33$ ) 点, 女性が78.61 ( $SD=12.00$ ) 点であっ

た。これらの得点について男女間で  $t$  検定を行ったところ,  $t=-4.23$  ( $df=575$ ;  $p < .001$ ) で有意差が認められた。効果量は  $d=.36$  であった。

次に、身体部位ごとに不満足感得点について男女間で  $t$  検定を行った (Table1)。男性の方が女性と比べて有意に不満足感得点が高い身体部位は「髪の毛」, 「耳」の2箇所であった。この2箇所についての効果量はそれぞれ  $d=.26$  および  $d=.28$  であった。女性の方が男性と比べて有意に不満足感得点が高い身体部位は「鼻」, 「皮膚」, 「胸の大きさや形」, 「顔の輪郭」, 「体格」, 「腹部」, 「下肢」, 「臀部」, 「腕」, 「肩」, 「太もも」, 「体重」, 「体毛」の13箇所であった。効果量の値は  $d=.19$  から  $d=.83$  の値を示した。「目」, 「頭の形」, 「唇」, 「顎」, 「歯」, 「胸部の筋肉」, 「頬」, 「首」, 「額」の9項目については、男女間で不満足感得点に有意な差は認められなかった。効果量も  $d=.01$  から  $d=.12$  と低い値を示した。

#### 2. 身体不満足感と身体醜形懸念の関係について

身体不満足感と J-BICI で測定される身体醜形懸念の下位因子合計得点との間での Pearson の積率相関係数を Table2 および Table3 に示した。なお、J-BICI 下位因子の  $\alpha$  係数は男性のみの場合では  $\alpha = .84$  から  $\alpha = .87$  の値を、女性のみの場合では  $\alpha = .82$  から  $\alpha = .84$  の値を示した。この結果より、J-BICI についても十分な内的整合性が保たれていると判断し、以下の分析を進めた。

相関分析の結果、男性では J-BICI の下位因子である「容姿の問題に対する安全確保行動」因子の合計得点は「髪の毛」, 「鼻」, 「皮膚」, 「頭の形」, 「顔の輪郭」, 「唇」, 「顎」, 「下肢」, 「耳」, 「頬」, 「臀部」, 「首」, 「額」, 「肩」, 「太もも」, 「体毛」の不満足感得点との間で有意な低い正の相関を認めた。「容姿の問題からの回避行動」因子の合計得点は「歯」以外の全

Table1 身体部位別に見た身体不満足感得点の性差 (N=577)

身体部位	Men (N = 327)	Women (N = 250)	<i>t</i> -score	<i>Effect size</i> (Cohen's <i>d</i> )
	Mean ( <i>SD</i> )	Mean ( <i>SD</i> )		
髪の毛	3.23 (0.99)	2.98 (1.05)	2.91**	0.25
鼻	3.11 (0.90)	3.34 (0.84)	-3.04**	0.26
皮膚	3.12 (0.98)	3.31 (1.03)	-2.25*	0.19
目	3.06 (0.94)	3.02 (1.08)	0.41	0.04
胸の大きさや形	2.98 (0.88)	3.50 (0.92)	-7.03**	0.58
頭の形	3.05 (0.89)	3.04 (0.87)	0.22	0.01
顔の輪郭	3.09 (0.82)	3.35 (0.91)	-3.58**	0.30
体格	3.18 (1.00)	3.54 (1.02)	-4.24**	0.36
唇	3.05 (0.82)	3.07 (0.86)	-0.18	0.02
顎	3.02 (0.80)	3.12 (0.85)	-1.52	0.12
腹部	3.14 (0.97)	3.64 (0.99)	-6.07**	0.51
歯	3.24 (1.00)	3.29 (1.11)	-0.56	0.05
下肢	3.08 (0.95)	3.57 (0.98)	-6.12**	0.51
胸部の筋肉	3.16 (0.94)	3.23 (0.69)	-1.02	0.08
耳	2.87 (0.88)	2.63 (0.83)	3.29**	0.28
頬	3.00 (0.83)	2.94 (0.84)	0.80	0.07
臀部	2.99 (0.84)	3.56 (0.84)	-7.93**	0.68
腕	3.00 (0.89)	3.19 (0.95)	-2.45*	0.21
首	2.92 (0.82)	2.93 (0.87)	-0.15	0.01
額	3.06 (0.85)	3.04 (0.81)	0.26	0.02
肩	2.92 (0.86)	3.11 (0.93)	-2.56*	0.21
太もも	3.09 (0.89)	3.86 (0.90)	-10.33**	0.86
体重	3.11 (0.96)	3.70 (1.01)	-7.13**	0.60
体毛	3.18 (0.98)	3.65 (0.92)	-5.84**	0.49

*df* = 575, \**p* < .05, \*\**p* < .01

Table2 男性における身体不満足感と身体醜形懸念の相関 (N=327)

身体部位	J-BICI		
	容姿の問題に 対する 安全確保行動	容姿の問題から の回避行動	容姿への 否定的評価
髪の毛	0.14*	0.18**	0.28**
鼻	0.20**	0.21**	0.38**
皮膚	0.14*	0.14**	0.31**
目	0.09	0.16**	0.15**
胸の大きさや形	0.10	0.16**	0.20**
頭の形	0.18**	0.23**	0.30**
顔の輪郭	0.23**	0.29**	0.38**
体格	0.10	0.16**	0.29**
唇	0.13*	0.21**	0.31**
顎	0.19**	0.21**	0.33**
腹部	0.11	0.13*	0.26**
歯	0.09	0.10	0.22**
下肢	0.17**	0.16**	0.36**
胸部の筋肉	0.10	0.22**	0.29**
耳	0.14**	0.18**	0.23**
頬	0.20**	0.27**	0.37**
臀部	0.16**	0.24**	0.28**
腕	0.10	0.19**	0.28**
首	0.15**	0.24**	0.32**
額	0.23**	0.24**	0.35**
肩	0.12*	0.19**	0.26**
太もも	0.19**	0.24**	0.31**
体重	0.10	0.16**	0.22**
体毛	0.19**	0.23**	0.31**

\**p* < .05, \*\**p* < .01

Table3 女性における身体不満足感と身体醜形懸念の相関 (N=250)

身体部位	J-BICI		
	容姿の問題に 対する 安全確保行動	容姿の問題から の回避行動	容姿への 否定的評価
髪の毛	0.11	0.28**	0.23**
鼻	0.10	0.21**	0.26**
皮膚	0.16*	0.25**	0.28**
目	0.10	0.19**	0.32**
胸の大きさや形	0.15*	0.16**	0.31**
頭の形	0.21**	0.25**	0.36**
顔の輪郭	0.21**	0.18**	0.36**
体格	0.29**	0.17**	0.54**
唇	0.22**	0.24**	0.38**
顎	0.14*	0.21**	0.30**
腹部	0.30**	0.16**	0.39**
歯	0.03	0.18**	0.17**
下肢	0.23**	0.18**	0.34**
胸部の筋肉	0.17**	0.23**	0.27**
耳	0.01	0.22**	0.19**
頬	0.09	0.22**	0.33**
臀部	0.28**	0.26**	0.42**
腕	0.25**	0.23**	0.44**
首	0.18**	0.22**	0.33**
額	0.12	0.21**	0.27**
肩	0.09	0.15*	0.26**
太もも	0.26**	0.12	0.37**
体重	0.23**	0.21**	0.47**
体毛	0.22**	0.16**	0.35**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 

での身体部位における不満足度得点との間で有意な低い正の相関を認めた。「容姿への否定的評価」因子の合計得点は全ての身体部位における不満足度得点との間で有意な正の相関を認めた (Table2)。

女性では J-BICI の下位因子である「容姿の問題に対する安全確保行動」因子の合計得点は「皮膚」、「胸の大きさや形」、「頭の形」、「顔の輪郭」、「体格」、「唇」、「顎」、「腹部」、「下肢」、「胸部の筋肉」、「臀部」、「腕」、「首」、「太もも」、「体重」、「体毛」の不満足感得点との間で有意な低い正の相関を認めた。「容姿の問題からの回避行動」因子の合計得点は「太もも」以外の全ての身体部位における不満足度得点との間で有意な低い正の相関を認めた。「容姿への否定的評価」因子の合計得点は「体格」、「臀部」、「腕」、「体重」の不満足感得点とは有意な中程度の正の相関を、その他の全ての身体部位における不満足度得点との間では有意な低い正の相関を認めた (Table3)。

次に、身体不満足感と身体醜形懸念の関係を検討するために、Fig1 のモデルについて男女別に共分散構造分析を行った。その結果、男性においては適合度指標として GFI=.80, AGFI=.76, CFI=.87, RMSEA=.082, AIC=1141.97, CAIC=1405.41, 女性では GFI=.69,

AGFI=.63, CFI=.68, RMSEA=.099, AIC=1220.84, CAIC=1469.52 の値が得られた。男女いずれにおいても十分な適合度指標が得られたとは判断できなかったため、以降は男女それぞれ Fig1 のモデルより J-BICI の合計得点との相関が低い身体部位項目を漸減させていくことでモデルの精緻化を図った。その結果、男性については Fig2 のモデルにおいて適合度指標として GFI=.96, AGFI=.92, CFI=.97, RMSEA=.089, AIC=76.42, CAIC=148.27 の値が得られた。男性におけるモデルでは、身体醜形懸念と身体不満足感に中程度の関連が認められ、身体不満足感が鼻、顔の輪郭、頬、額への不満にそれぞれ正の影響を及ぼしていることが示された。一方、女性については Fig3 のモデルにおいて適合度指標として GFI=.95, AGFI=.90, CFI=.96, RMSEA=.09, AIC=89.48, CAIC=166.33 の値が得られた。女性におけるモデルでも身体醜形懸念と身体不満足感との間に中程度の関連が認められ、身体不満足感が体格、腹部、臀部、腕、体重への不満にそれぞれ正の影響を及ぼしていることが示された。男女いずれのモデルにおいても単一モデルとしての適合度指標である GFI, AGFI, CFI, RMSEA の値が十分であったこと、また、複数モデル間での適合度の高さを示す AIC および CAIC の値が最も低かつ

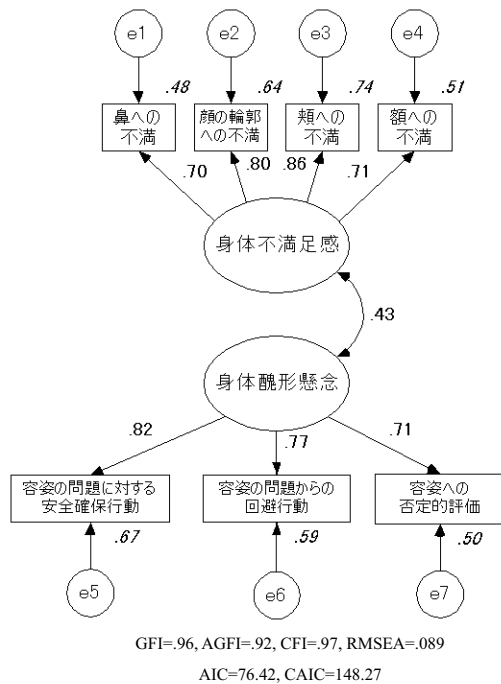


Fig2 男性 (N=327)における身体醜形懸念と身体不満足感の関係 (最終モデル)

\*図中の数値のうち、潜在変数から観測変数への矢印の数値はパス係数を示す。  
また、斜体で表示された数値は $R^2$ 値 (決定係数)を示す。

たことから、Fig2およびFig3のモデルを身体醜形懸念と身体不満足感との関係についての最終モデルとして採用することとした。また、モデルにおける全てのパス係数は1%水準で有意であることが示された。

#### IV 考 察

##### 1. 身体不満足感の性差について

身体不満足感の性差について検討を行ったところ、身体部位全体では女性の方が男性よりも有意に不満足感得点が高い結果が得られた。この結果はこれまでの先行研究の結果と一致するものであった。一方、標本効果量の点から検討を行ったところ、男女間での不満足感の差異の程度は小さいものであることが示された。従来、青年期の女性における身体不満足感は様々な不適応問題との関連で重要視されてきているが (Cash et al., 1996), 不満足感の性差の程度が男女間で小さいものである、すなわち男性においても女性と同水準の身体不満足感を有している可能性があるという今回の結果より、今後、青年期にあたる大学生の男性の身体不満足感についても着目していく必要のある可能性が示唆される。

身体部位ごとに不満足感の比較を行ったところ、「髪の毛」と「耳」の2部位においてのみ男性が女性よりも有意に不満足感が高かった。しかし、標本効

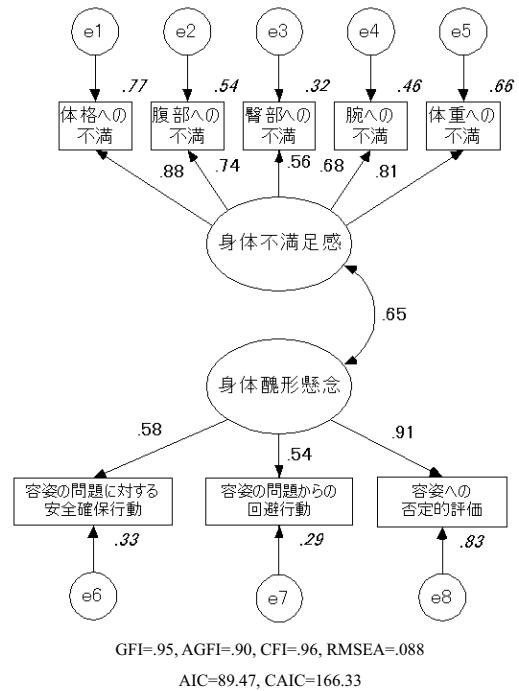


Fig3 女性 (N=250)における身体醜形懸念と身体不満足感の関係 (最終モデル)

果量の値は低かったことから、これらの身体部位に対する不満足感の性差は僅かなものであることが示唆される。なお、「髪の毛」については、Phillips et al. (1997) や Phillips et al. (2006) により男性において「髪の毛」の量に対しての不満が強いことが報告されているが、今回の調査では「髪の毛」に対する不満足感の内容については尋ねていない。今後、更なる検討が必要である。一方、「耳」については先行研究では男女間で性差が認められていなかったが、今回の調査では性差が認められた。Sarwer et al. (2008) によれば、身体不満足感は化粧行動や美容整形等の身体装飾行動を動機づけるとされている。また、村澤ら (2005) の調査では、我が国の男子大学生が20%、女子大学生の51%がピアスの装着経験があることが報告されている。こうしたことから、今回の結果は女子大学生ではピアス等の身体装飾行動の結果として「耳」に対する不満足感が低減された一方、そのような身体装飾行動が少ない男子大学生では不満足感が低減されなかった、もしくは女子と比べて不満足感の低減具合が少なかった可能性が推察される。実際に身体装飾行動が身体不満足感を低減させることができるかについては今後の検討が必要である。

また、女性においては13の部位で男性と比して不満足感得点が有意に高いという結果が得られた。このう

ち、「鼻」、「皮膚」、「顔の輪郭」、「体格」、「腕」、「肩」については標本効果量の値が低かったことから、これらの部位に関しては不満足感の性差は僅かなものであると考えられる。一方、「胸の大きさや形」、「腹部」、「下肢」、「臀部」、「体重」、「体毛」、「太もも」に関しては標本効果量が中程度から高い値を示した。したがって、この7部位については女子大学生に特徴的な不満足の対象となりやすい部位である可能性が示唆される。「体毛」についてはその濃さについての不満が強いことが Phillips et al. (1997) や Phillips et al. (2006) により指摘されているが、こうした不満内容については今後の検討課題である。一方、それ以外の6部位については体形やプロポーションに関連する部位であり、痩身であることが美しいとされる社会風潮（馬場, 2004）の影響を受けている可能性が示唆される。

「目」、「頭の形」、「唇」、「顎」、「歯」、「胸部の筋肉」、「頬」、「首」、「額」の9項目についての不満足感得点は男女間で有意差が認められなかった。これらの結果は先行研究の結果を支持するものであった。

## 2. 身体不満足感と身体醜形懸念の関係について

相関分析の結果、身体部位ごとの不満足感は J-BICI の下位因子合計得点との間で全般的に有意な正の相関を示した。

身体部位ごとの不満足感と J-BICI の下位因子である「容姿の問題に対する安全確保行動」との相関は男女間で若干その様相が異なっていた。男性においてのみ「髪の毛」、「鼻」、「耳」、「頬」、「額」、「肩」への不満足感が「容姿の問題に対する安全確保行動」と有意な正の相関を認めた。一方、女性においてのみ「胸の大きさや形」、「体格」、「腹部」、「胸部の筋肉」、「腕」、「体重」が「容姿の問題に対する安全確保行動」との間に有意な正の相関を示した。これらの身体部位についての不満足感は、男女で独自に身体醜形懸念に関連する可能性が示唆される。一方、男女ともに正の相関が認められた部位としては「皮膚」、「頭の形」、「顔の輪郭」、「唇」、「顎」、「下肢」、「臀部」、「首」、「太もも」、「体毛」があげられる。これらの身体部位に関する不満足感、男女に共通して身体醜形懸念に関連する可能性が推察される。しかし、男女ともに身体部位に対する不満足感と「容姿の問題に対する安全確保行動」との相関は有意ではあるものの相関係数の値が低かった、したがって、こうした身体部位への不満足感のみならず、その他の視点からも「容姿の問題に対する安全確保行動」について関連する要因を検討することが今後必要であろう。

一方、身体部位ごとの不満足感と J-BICI の下位因子である「容姿の問題からの回避行動」および「容姿への否定的評価」については、男女間においてはほぼ全ての身体部位項目に対する不満足感得点と有意な正の相関を示していた。したがって、これらの因子については、身体部位への不満足感と正の関連を持つことが示唆される。また、「容姿への否定的評価」因子に関しては他の2因子と比較して身体部位ごとの不満足感との間で高い正の相関係数の値を示していた。特に、女性においては「体格」、「体重」、「腕」、「臀部」等の部位との相関係数が今回の調査対象となった身体部位の中では相対的に高い値を示した。これらの部位への不満足感は女性において摂食障害の症状を訴える群に特徴的であることが示されている（McFarlane et al., 2001）。一方、臨床群においては身体醜形障害と摂食障害の重複が生じることも指摘されている（Ruffolo et al., 2006）。これらの部位への不満足感が身体醜形障害と摂食障害の弁別に有用な概念かについて、今後の検討が望まれる。

先行研究より、身体不満足感と身体醜形懸念との間に正の関連があることを仮定したモデルについて、男女間で共分散構造分析を用いたモデルの検証を行ったところ、最終モデルからは男女間で身体醜形懸念に関連する身体部位が異なる可能性のあることが見出された。男性では「鼻」、「顔の輪郭」、「頬」、「額」が、女性では「体格」、「腹部」、「臀部」、「腕」、「体重」が身体醜形懸念と関連する不満足の対象となりやすい身体部位であることが示唆された。相関分析の結果と併せると、男性においては主に顔に関連する部位が、女性においては体形やプロポーションに関連する部位が身体醜形懸念と関連する不満足感の対象となりやすい身体部位である可能性が窺われる。このように、身体醜形懸念に関連する不満足感の対象となりやすい身体部位については男女間で性差が認められることから、容姿の不満に関連するクライアントの訴えや悩みに対応する際には、不満の対象となる身体部位について性差を意識して関わるということが重要になることが示唆される。

## 3. まとめと今後の課題

本研究では質問紙を用いた調査研究により、男女間における身体不満足感の性差および身体醜形懸念との関連について検討を行った。その結果、男女間で身体部位ごとに不満足感に差異が認められること、およびその不満足感の程度にも差があることが見出された。また、身体不満足感と身体醜形懸念の関係についてモ

デル化を行い、その検証を行ったところ、男女ともに身体不満足感と身体醜形懸念との間に中程度の関連性が認められた。また、男女で身体醜形懸念に関連する不満足感の対象となりやすい身体部位が異なっている可能性が見出された。

本研究の限界として身体部位に対する不満足感についての調査方法があげられる。今回の調査では身体各部位に対する不満足感を点数化して尋ねたのみであり、その不満足感の内容については明らかにできていない。例えば、「髪の毛」や「体毛」についてはその量についての不満なのか質についての不満なのかは今回の調査では未解明なままである。「体重」についても太っていることへの不満なのか痩せすぎていることへの不満なのかは分からない。今後、不満足感の内容も踏まえた上での身体醜形懸念と身体各部位についての不満足感との関連についての研究が望まれる。

また、今回の結果は一般大学生を対象にしたものであり、この結果を臨床群へ適用していくことについては慎重であるべきであろう。今後は臨床事例を基にした詳細な研究が期待される。

#### 文 献

- Altamura C, Paluello MM, Mundo E, Medda S, Mannu P (2001) Clinical and subclinical body dysmorphic disorder. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 251, 105-108.
- American Psychiatric Association (2000) *Diagnostic and statistical manual of mental disorder, 4th text version ; DSM-IV-TR*. Washington DC : APA. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2003) : DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版 医学書院
- 馬場謙一 (2004) 摂食障害とボディイメージ こころの科学, 117, 26-30.
- Biby EL (1998) The relationship between body dysmorphic disorder and depression, self-esteem, somatization, and obsessive-compulsive disorder. *Journal of Clinical Psychology*, 54, 489-499.
- Cash TF, Grant JR (1996) The cognitive-behavioral treatment of body-image disturbances. Van Hasselt V, Hersen M (Eds.) *Sourcebook of Psychological Treatment Manuals for Adult Disorders*. New York: Plenum Press. 567-614.
- Cohen J (1992) A Power Primer. *Psychological Bulletin*, 112, 155-159.
- 南風原朝和 (2002) 心理統計学の基礎 統合的理解のために 有斐閣アルマ
- 金本めぐみ・横沢民男・金本益男 (1999) 青年期における身体と自己の相互認知に関する研究 上智大学体育, 33, 35-42.
- Lambrow C, Veale D, Wilson G (2012) Appearance concerns comparisons among persons with body dysmorphic disorder and nonclinical controls with and without aesthetic training. *Body Image*, 9, 86-92.
- Littleton HL, Axsom D, Pury CLS (2005) Development of the Body Image Concern Inventory. *Behaviour Research and Therapy*, 43, 229-241.
- McFarlane T, McCabe RE, Jarry J, Olmsted MP, Polivy J (2001) Weight-related and shape related self-evaluation in eating-disordered and non-eating-disordered women. *International Journal of Eating Disorder*, 29, 328-335.
- 村澤博人・大坊郁夫・趙鏞珍 (2005) 日本人と韓国人の国際比較研究 男女学生のアンケート調査から コスメトロジー研究報告, 13, 38-47.
- 鍋谷照・上田毅 (2004) 思春期における身体部位の不満足と自己意識 学校保健研究, 46, 372-385.
- Perugi G, Akiskal HS, Giannotti D, Frare F, Di Vaio S, Cassano GB (1997) Gender-related differences in body dysmorphic disorder (dysmorphophobia). *Journal of Nervous and Mental Disease*, 185, 578-582.
- Phillips KA (1991) Body dysmorphic disorder: The distress of imagined ugliness. *American Journal of Psychiatry*, 148, 1138-1149.
- Phillips KA, McElroy SL, Keck PE Jr, Pope HG Jr, Hudson JL (1993) Body dysmorphic disorder: 30 cases of imagined ugliness. *American Journal of Psychiatry*, 150, 302-308.
- Phillips KA, Diaz S (1997) Gender differences in body dysmorphic disorder. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 185, 570-577.
- Phillips KA (1998) Body dysmorphic disorder: clinical aspects and treatment strategies. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 62, A33-48.
- Phillips KA, Menard W, Fay C (2006) Gender similarities and differences in 200 individuals with body dysmorphic disorder. *Comprehensive Psychiatry*, 47, 77-87.
- Rosen JC, Reiter J, Orosan P (1995) Cognitive behavioral body image therapy for body dysmorphic disorder. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 63, 263-269.
- Ruffolo JS, Phillip KA, Menard W, Fay C, Weisberg RB (2006) Comorbidity of body dysmorphic disorder and eating disorder: severity of psychopathology and body image disturbance. *International Journal of Eating Disorder*, 39, 11-19.
- Sarwer DB, Crerand CE (2008) Body dysmorphic



- disorder and appearance enhancing medical treatment.  
*Body Image*, 5, 50-58.
- 23) 田中勝則・有村達之・田山淳(2011) 日本語版 Body Image Concern Inventory の作成 心身医学, 51, 162-169.
- 24) 豊田秀樹(2007) 共分散構造分析 [Amos 編] ー構造方程式モデリングー 東京図書
- (2012. 8. 20 受理)